



TITLE:

計画2-3 島しょ性を視野に入れた金華山ニホンザルの生態学的特性の研究(VI 共同利用研究 2.研究成果)

AUTHOR(S):

伊沢, 紘生; 遠藤, 純二; 佐々木, ちさと

CITATION:

伊沢, 紘生 ...[et al]. 計画2-3 島しょ性を視野に入れた金華山ニホンザルの生態学的特性の研究(VI 共同利用研究 2.研究成果). 霊長類研究所年報 1996, 26: 74-74

ISSUE DATE:

1996-11-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/164842>

RIGHT:

計画 2-2

日光におけるニホンザルの行動圏内の環境
特性と個体数パラメーター

小金沢正昭 (宇都宮大・農・演習林)

今木洋大 (農工大・連大・野生動物)

栃木県日光市及び今市市において、ラジオテレメトリーにより識別されている6群の個体数調査を行い、前年度と比較を行った。A群は1995-96年冬期のカウントで36(前年比: +5)、B:45(-1)、C:(データなし)、Og:63(-11)、Ki:66(-10)、Go:48(+1)であった。また、各群れの成獣の性比はA群から順に1:5、B群4:19、Og群3:8、Ki群3:7、Go群1:18であった。各群れの行動圏の面積は、最外郭法により推定を行い、A:5.5km²、B:6.4km²、C:6.0km²、Og:13.0km²、Ki:10.1km²、Go:7.0km²、という結果を得た。また、群れの追跡とは別にオス13個体に発信器を装着し、オスグループ及びソリタリーのレンジ、群れへの接近の時期、年齢、構成などに関する調査を行った。調査期間中は11個体の追跡ができ、2個体はソリタリー、3個体はオスグループ、6個体が群れオスとして確認された。オスグループに属した2頭は一時的な群れへの接近、離脱が観察された。これらのオスグループはいずれも個体数が大きいOg、Ki群に接近していることが明らかとなった。以上のことから、各群れの性比やオスグループの接近などは群れの個体数と関係すると考えられた。また群れの個体数は今回調査した地域の中央部に位置する群れで多く、資源の配置を反映した地域個体群の分布構造と関係していることが考えられた。

計画 2-3

島しょ性を視野に入れた金華山ニホンザルの生態学的特性の研究

伊沢紘生 (宮教大)、遠藤純二 (東浜小)、佐々木ちさと (山下小)

宮城県・金華山には現在野生ニホンザルが6群(A, B₁, B₂, C₁, C₂, D)、計280頭ほどが生息している。かれらを対象とした表記テーマでの研究を本年度を含め3年間継続した。具体的内容の主なものは、①1992年にC群から分裂したC₁、C₂の2群の追跡調査を行い、閉鎖環境で生起する分裂の生態学的要因について、過去4回の分裂と比較し調査した。②メスの初産年齢、出産間隔等の資料を収集し、閉鎖環境との関連の上で分析した。③出産率、幼児死亡率、個体数の変動率等を、島の気象や植物環境、かれらの食物となる植物の生産量の年変動との関連で分析した。④かれらの採食が閉鎖環境の植性にどのような影響を与えているのか(食圧)について、実態把握と歴史的経過を調査した。⑤形態比較のため、金華山で収集した53体の骨格標本を整理し、同時に同緯度内陸部のサル7体を収集し標本作成した。そしてそれらの比較分析を毛利俊雄氏(京大・霊長研)に依頼した。⑥1994年春の大量出産(76頭)の、金華山個体群への影響について基礎資料を収集した。

以上のうち①、②、③については、「宮城教育大学紀要」第30巻第2分冊(147~157頁)において、研究成果の一部をすでに公表した。また④については、「宮城県のニホンザル」第8号(1~37頁)で、同様に公表した。⑤、⑥に関しては目下鋭意整理中である。